

綺岫宮

王

建

玉樓傾側して粉牆空し

重疊たる青山故宮を遶る

武帝去りて来り紅袖尽き

野花黄蝶春風を領す

【作者】王建(？〜八三〇年)中唐の詩人。字は仲初。潁川(河南省許昌)の人。七七五年進士に及第、渭南(陝西省)の尉となった。その後太府寺丞、秘書丞、侍御史を歴任して、太和年間に陝州(河南省)の司馬となり、また辺境に従軍したこともある。韓愈の門下で、白居易、劉禹錫とも交際があった。樂府(がふ)にすぐれ、友人の張籍とともに「張王樂府」と称され、なかには人民の苦しみをうたった作もある。宮女の生活をうたった『宮詞』が特に有名。蜀の花蕊(かずい)夫人、宋の王珪(おうけい)の宮詞と合せた『三家宮詞』がある。詩集『王建詩集』(十卷)。

【語釈】\*綺岫宮…漢の武帝が建てた宮殿。洛陽永寧県の西五里に在ったとも、驪山に在ったとも言われている。\*玉樓…美しい樓閣。  
\*傾側…かたむく。今はもうさびれていると言う。\*粉牆…白く塗られた土塀や壁。\*重疊…いくえにも重なっている。  
\*青山…おおおおと樹木の茂っている山。\*故宮…綺岫宮をいう。\*武帝…ここでは玄宗のことを諷刺した表現。  
\*紅袖盡…紅袖は紅い袖のことで、ここでは女官をいう。

【通釈】「三体詩評釈(野口寧齋著)」に「綺岫宮驪山に在り。漢武の建つる所にして、明皇の曾て行幸せる所なり。山光圍繞するに因つて綺岫と名づくという。承句直ちに其の形勝を録して、江山依然として人事の已に非なるを説く。武帝は借りて明皇を指すなり。来は以て爾来の義となす。而して玉樓粉牆青山紅袖黄蝶等の字面、皆以て綺岫を襯出する所以にあらざるは無し。」とあり。